

お父さんのうわき？

小五・高岩 恭子

それは、五月にしては暑い、ある日曜日の夕ご飯の時だった。

「あゝ。うわきしてみようかな。」

なぬ？今、何て？私となりでいつものビールを飲んでいたお父さんが、ぼそつとこんなことを言ったのだ。あまりのショックに、私の時間が止まった。ごはんを食べる手も動かない。(今の：聞き間違いじゃないよね？お父さん、うわきつて言った。)幸いにもお母さんは台所で食器洗い中、弟はTVのクイズ番組に夢中で、私以外にお父さんのさっきの言葉は聞こえなかったみたいだ。本当はお父さんに聞き返してみたかったけど、やめた。お母さんや弟にもショックが大きすぎると思うから。私はむねのドキドキが収まらないまま、何もなかったかのようにご飯を食べることにした。

うわき。確か結婚している男の人が奥さん以外の人を好きになっちゃうってやつだよ。それくらい私だって映画やテレビで知っている。夜、布団に入ってから、私は気になってなかなか眠れなかった。お父さん、いつもは「お母さん大好き。」とか言ってるのに、急にどうしたんだろう。お母さんのこと、嫌いになったのかな。それとも、お母さんより好きな人ができた、とか？あゝ、もう。ちつとも眠れない！私は頭の中がぐるぐるするのと同じように、布団を体にぐるぐる巻きつけて、何度も何度も寝返りした。

翌日、学校に行っても、私の頭の中は昨日のお父さんの言葉でい

っばいだった。ちっとも勉強に集中できない。授業をしている坂口先生の声が、外の風の音くらい小さく感じる。うわきって、相手はだれかな。男の人、はないか。女の人だったら、私が知ってる人かな。

昼休み、教室でぼーっとしていると、友達のアッチちゃんが声をかけてきた。

「ねえねえ、今日はどうしたの？ 悩みごと？」

ギクッ。私の心臓が大きく動いた。笑われるかもしれない。だけど。(親友のアッチちゃんなら言ってもいいかな。) と思い、私は昨日のことを話してみた。アッチちゃんは笑わなかった。それどころか、「なにそれ！ 大事件じゃない。」と、大きな声をあげた。

「やっぱり、そうかな？」

「そうだよ！ これは『家庭ホウカイの危機』ってやつだよ。最悪リコンになって、家族がバラバラになっちゃう。」

え？ 家族バラバラ？ それは、絶対にいやだ。私はますます心配になってきた。すると、

「これは、探偵になるしかないね。」

アッチちゃんの目がキラリと光った。

「はい？」

「ほら、アニメとか本でよくあるじゃない？ 夫のうわきをうたがって、探偵に依頼するってヤツ。」

しまった。アッチちゃんは大のミステリー好きだった。目がどんどん輝いてきて、話が大きくなっていく。

「そして、調査中に殺人事件にまきこまれたり。犯人に命をねらわれたり。」

「いや、ないない。」

話がずれていきそうなので、私はすかさずツッコんだ。

「まあ、とにかく。心配なら、お父さんの行動を調査したらいいんじゃない？うわきのしようこが出てくるかもよ。」

確かに。私の聞き間違いかもしれないけど、調査は必要かも。私たちはお互い目と目を合わせ、「うん。」と大きくうなずいた。

「あ、探偵さん。報告書よろしくね。」

え？マジですか？

放課後、今日はスイミングの日だ。帰りだけお父さんがいつも迎えに来てくれる。調査をするなら、この時がチャンスね。帰宅後、私は弟といっしょにスイミングへ歩いて向かった。もちろん、調査のための手帳も忘れずに。私は泳ぎの練習をしながら、時々頭の端っこで調査の計画も立てていた。

練習後、お父さんがスイミングの玄関で私たちを出迎えてくれた。

玄関には他のお迎えのお父さんお母さんもたくさん来ている。

「じゃあ、またね。」

弟の幼なじみのあきくんママが弟とお父さんに声をかけてくれた。

「あ、どうも。」

お父さんがあきくんママに頭を下げる。むむっ。キラ〜ン。容疑者一号発見。弟が三才の頃から知ってる人だし、ありえるかも。私はすかさずメモを取る。

「何してんの？」

弟が不思議そうに私を見たけど、

「うん。ちよつとね。」

と適当にごまかした。すると、今度はお父さんの携帯電話が鳴った。

「あ、広報の竹下さんから連絡メールか。」

キラりん。容疑者二号、保護者会広報の竹下さん。実はお父さんは学校の保護者会会長をしている。そのため、保護者会連絡で電話やメールがよく来る。うーん、あやしい。早速、メモメモ。帰路を三人で歩きながら、またお父さんの電話が鳴った。

「ああ、坂口先生。こんばんは。」

キラりん。容疑者三号、担任の坂口先生。先生は、女の先生だ。しかも、独身。まさか、とは思うけど、ありえないわけじゃない。

私がモヤモヤ考えている間に、電話はあっさり終了。

「今日元気なかったけど大丈夫ですか？だってよ。」

お父さんは電話を切った後、私に話しかける。

「え？な、何もないよ。」

私は全力で首を振る。なんだ、私の心配の電話だったのか。私は少しホッと息をはいた。

すると、

「ねえ、お父さん。アイス食べたい。コンビニ寄ってもいい？」

弟が帰路の途中にあるコンビニを指さした。

「おっ、いいね。ちょうどお父さんもコンビニに用事があった。」

そういうと、二人は早々とコンビニの中に入っていった。え？用事？ま、まさか。コンビニの店員さん？たしかここの店員さんは、若い女性だったはず。

「お父さん、待って〜。」

私が遅れて店内に入ると、そこにはすでにビールを手にしたお父さんが。あれ？

「これこれ。昨日CMで見て、すごく飲んでみたくて。お父さん、ビールは『ミリンの一番星』って決めてるけど、どーしても今回はうわきしてみたくてさ。」



画：石山さやか

はあ？なに？うわきってビールのこと？私は体から全ての気力と
たましいがぬけていくように、床にへたばってしまった。もう、何
なの？心配してソンした。

【ボスへ。報告書 お父さんのうわき相手は新商品のビールでした。
以上】